

満洲温泉案内記を読む

―戦前期日本人の中国観光―

東洋文庫研究部主幹

瀧下彩子



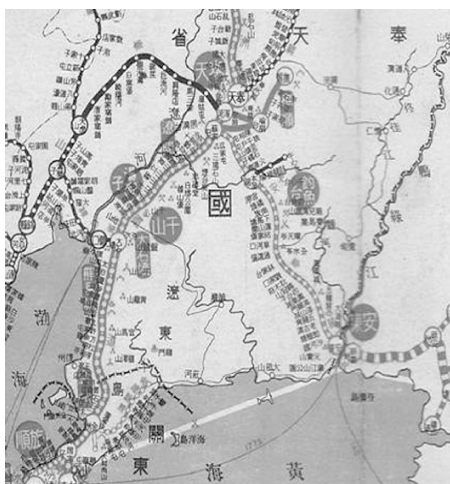
明治時代の末、日本国内ではすでに現在に近い形での温泉旅行が成立しつつありました。鉄道の建設が進み、1906年以降、主な私鉄が国有化されて全国的に鉄道網が発達すると、東京周辺の伊香保、草津、熱海、箱根などに多くの湯治客が訪れるようになりました。特に第一次世界大戦後、国民生活の向上にともなって観光が可能な富裕層の裾野が広がると、日常生活を離れて異域に遊ぶ温泉行楽は一大ブームとなっていきます。バスと乗り合い自動車の発達、鉄道の電化によって旅行から煤煙の悩みが解消されたことも、旅行の大衆化に拍車をかけました。

このような日本国内の温泉旅行ブームを背景に、当時、日本が進出していた中国東北部（以下、本稿では「満洲」の呼

称を用います）や朝鮮半島、台湾でも、日本式の温泉旅館やホテルが建設され、少し贅沢な温泉旅行として、日本国内に紹介されました。ここでは、そのうちの満洲の温泉旅行について紹介したいと思います。



『婦人倶楽部』(1927年7月号) 附録



上記附録の満洲部分

初期の満洲旅行

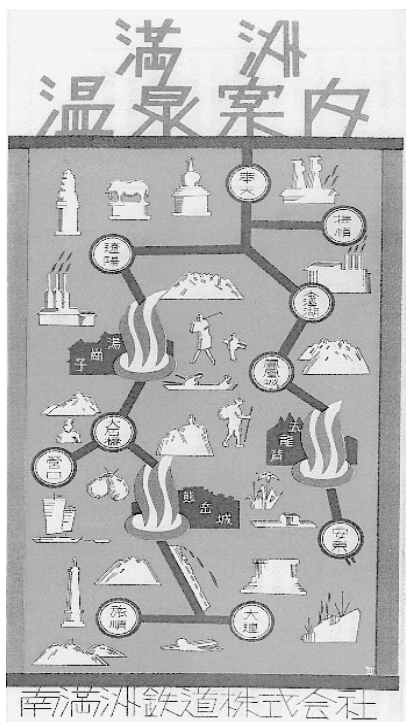
1912年、外国人観光客を日本に誘致するという目的のもとに、ジャパン・

ツリスト・ビュローが設立され、同時に台北支部、大連・朝鮮支部が開設されました。大連支部は南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）の支社内にあり、その支部長は当時の満鉄社長・中村是公です。日清、日露戦争を経て、「外地」である満鮮や台湾を旅行する日本人の数が増すと、ビュローでは日本人の視察旅行などの手配業務の比率が増していきました。

一方、1906年に誕生した満鉄もまた、旅客誘致のため、大連・星が浦・旅順・奉天・長春にヤマトホテルを建設するほか、安奉線の広軌化工事を行うなど、沿線施設の改善を精力的に進めていきました。当時、満鉄が満洲視察の目玉としていたのは、日清・日露戦争の戦跡でしたが、それは見所であると同時に、観光地としてのマイナスイメージでもあったようです。

1920年代に入っても、一般的な日本人の満洲認識は次のようなものでした。

纔かに日露戦争当時の出征軍人に依つて伝へられた満洲が、今日尚母国人数数の脳底に存し、満洲と

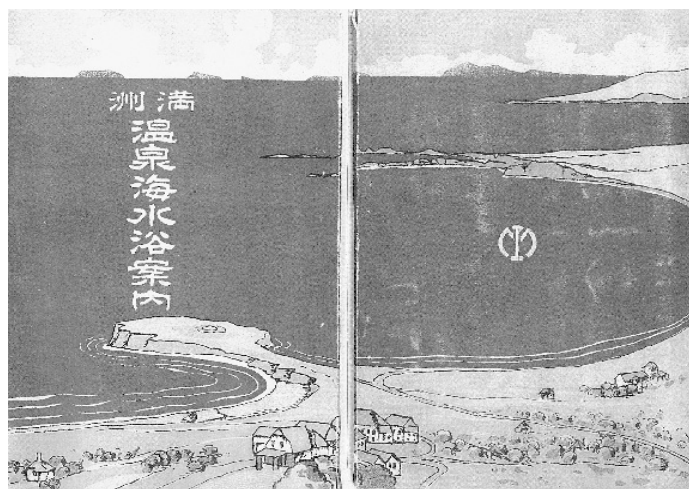


『満洲温泉案内』（満鉄、1933年）表紙

いへば馬賊が横行し氣候が悪く、水や空氣が人身に適しない所と「以下略」（棟尾松治『満洲見物支那紀行』1922年）

満鉄をはじめ、関東庁や商業会議所は、満洲の快適さをしきりに宣伝し、丸の内にあったジャパン・ツリスト・ビュローの窓口では、旅客に対して、「満洲は内地と少しも変わりません。着物でも大丈夫ですよ」などと声をかけることもあったようです。

このような状況のなかで、満鉄が着目していたのが、国内の温泉ブームです。戦場であり、仕事の場ではあっても、行楽地とはいえない満洲。しかし、そこで温泉旅行ができると判れば、満洲イメージには、日常的な親しみと心を浮き立たせ



『満洲温泉海水浴案内』（満鉄、1919年）表紙

るような楽しさが加わったと思われます。温泉ブームは、国民の満洲イメージを新たなものにする絶好の機会でした。すでに1909年の『南満洲鉄道温泉案内』において、満鉄は、湯崗子・熊岳城・五龍背といった満洲の温泉を簡単に紹介していました。1919年に新たに『満洲温泉海水浴案内』と題する分厚い冊子を刊行しました。これは、泉質や旅館の設備、付近の名所などに関する詳細なガ

イドブックです。以下では、「満洲三大温泉」と呼ばれた3か所の温泉地について、少し詳しく紹介したいと思います。

■満洲の三大温泉

(1) 湯崗子温泉

満鉄本線の湯崗子駅から約400mの満鉄附属地内に位置しています。駅から温泉までは柳の並木が続き、田園情緒をかもししていました。湧出量は一昼夜200(300)石(約4500m³前後)と記され、24時間の湧出量とすれば、毎分32m³程度と考えられます。これは、あまり規模の大きい温泉とは言えません。湯の温度は73・5度で、無色透明のアルカリ泉(ややラジウム性)で、リウマチ、湿疹、ヒステリー、胃腸カタル、婦人病などに効能があるとされました。

温泉には、唐の太宗李世民が高句麗遠征のうちに傷兵を療養させたとの伝説があり、また、乾隆帝が滞在したとも言われますが、いずれも事実関係は不明です。日清戦争の際、鳳凰城から牛荘に進軍した日本軍がこの温泉を利用し、その後、ロシア軍が転地療養所としました。ロシアが療養施設に用いた建物は、のちに日本人が旅館として再利用しています。



1938年頃の対翠閣

本軍は、日露戦争で遼陽を占領した後、ここに陸軍の転地療養所を置きました。湯崗子温泉は、三大温泉の中でも満鉄が最も力をいれて経営した温泉です。その理由は、湯崗子温泉が置かれた良質な環境にありました。

第一次世界大戦後に、国民の体位向上を標榜した政府の健康増進政策によって山岳登山が流行すると、登山のあとで温泉を利用するという旅行のスタイルが定



現在の対翠閣

着していきます。また、乗り合い自動車の発達によって、人里離れた山奥などへの旅行が可能になり、史跡や伝説に由来する名所への旅行も流行していました。

すでに述べたように、湯崗子には、唐の太宗や清の乾隆帝が利用したという「支那通」好みの伝説がありました。日露戦争においては遼陽会戦の戦跡であり、視察の定番ルート・鞍山製鉄所の近隣に位置し、さらには背後に霊峰千山をひか

え、温泉地としてこれ以上は望めない条件を持っていたと言えます。

1910年代に高級旅館として知られた清林館は、1919年8月、『満洲温泉海水浴案内』の印刷中に惜しくも全焼してしましますが、満鉄はこの窮地を逆手にとり、資本金200万円を投じて湯崗子温泉株式会社を設立、破風屋根を持つ豪華二階建和風旅館の対翠閣と洋式ホテル玉泉館を建造しました。

その後、中国人浴場「金温泉」の設備が劣悪であることを知った満鉄の6代目社長・早川千吉郎が、「日支友好上問題である」と指摘したことから、1922年10月には、中国人用温泉施設として「龍泉別墅」が開業しました。また、増



溥儀が滞在したと云われる部屋の浴室

加するロシア人湯治客に対応するため、「玉泉館」にはロシア館が増設されています。1920年代半ばになると、満鉄の招待を受けた田山花袋や与謝野晶子といった各界の文化人が、旅行記などで、湯崗子温泉をさかんに宣伝しました。これは、『金色夜叉』や『不如帰』によって湯治客をあつめた箱根や伊香保のひそみにならったものかもしれ

ません。

しかし、なんといっても湯崗子温泉の名を高めたのは、1932年の溥儀の滞在です。満洲国執政となることを承諾した溥儀は、天津から営口を経由し旅順にむかう途中で、この湯崗子に滞在しました。溥儀夫妻とその側近の滞在のために、湯崗子温泉では「対翠閣」を修築しています。1933年以降の旅行案内では、湯崗子温泉は「皇帝の温泉」として紹介され、溥儀の滞在を誇らしげに記載しています。

(2) 熊岳城温泉

熊岳城は遼代以来の古城として知られ、満鉄本線熊岳城駅から4kmほど離れた熊



熊岳城に残る満鉄の農事試験場趾



1930年頃の熊岳城温泉

岳河の川沿いにあり、河床から湯が湧出しています。川筋が変わると湧出場所も変わることから、湧出量などは不明ですが、温度は50度程度とされ、湯岡子と同じアルカリ泉です。

付近の住民は川底を掘って入浴していましたが、1906年に日本軍の守備隊長がはじめて浴槽を設け、「同楽温泉」と名付けました。附属地内に位置し、後に満鉄を特急が走るようになると、大連から3時間ほどで行けるようになったことから、旅順・大連在住の日本人には最も利用しやすい温泉であったと思われる。

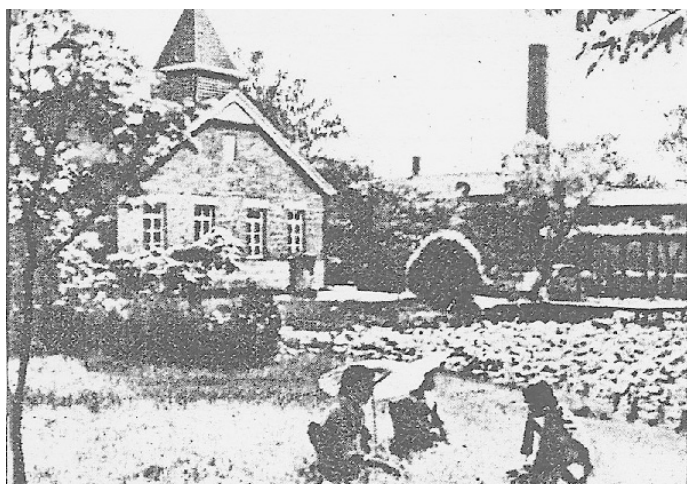
日露戦争後に「温泉ホテル」が経営され、河原を利用した「砂湯」が名物でした。後には、冬に砂湯を楽しむために、ガラス張りの「イタリー式砂湯浴場」が建設されています。

湯岡子温泉が大人の社交的な役割を持ち、特に溥儀の滞在後は高級旅館として機能したのに対し、熊岳城温泉は庶民的な温泉でした。1919年に初めて小学生のための温泉学校が開設され、以降毎年行われています。1935年に作製された『満洲イロハカルタ』には、「ヨンセンハスナユデ名高イイウガクジャウ」の札が見え、また、1939年に刊

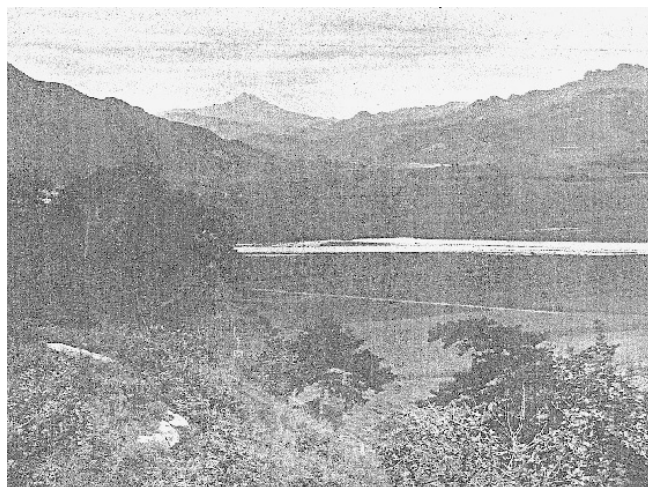
行された尋常小学校低学年用の副読本にも紹介されるなど、熊岳城が当時の子供たちにとって非常に親しみ深い温泉であったことをうかがわれます。

(3) 五龍背温泉 ごりゅうはい

満鉄安奉線の五龍背駅の近隣に位置し、安東（現在の丹東）からの所要時間は30分ほどでした。湯岡子と同様に、唐の太宗の伝説があり、地元では光緒年間から



1930年頃の五龍閣



五龍山（1930年頃）

存在が知られていました。日清戦争で、第5師団第11連隊の兵站部が発見し、日露戦争の際には療養所が置かれ、その後、日露戦争に従軍していた庵谷という日本人が「温泉ホテル」を経営しましたが、やがて「五龍閣」という温泉旅館が建設されて、1918年から満鉄がその経営をひきつぎました。

湧出量は、案内記によって250～500石と幅があり、判然としません。57度のアルカリ泉で、無色透明の湯質は、



現在の五龍山

「五龍背の湯は針を落としても見える」と言われるほどでした。

湯岡子や熊岳城とは違って附属地内ではなく、奉天から5時間、京城や平壤からも1日がかりの行程となるため、朝鮮・満洲在住の日本人にとっても気軽に利用できる温泉ではなかったと思われます。しかし、金剛山系の田園風景の中に位置し、遠くに五龍山をながめる風情は、日本の長野や山梨の風景にも似通い、「満

州とは思へぬ内地田園村落の趣が深い」、「故郷の生活を偲ぶ魅力」が売り物でした。

1929年末に日本温泉協会が設立されると、翌1930年には日本温泉協会満洲支部がジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部に設けられます。その後、満洲事変によって満洲への旅客は一時減少しますが、1935年には満洲国政府、鉄路総局関東州庁サイドから役員を迎え、3大温泉以外の温泉地も会員に加わるなど、協会の規模は拡大します。やがて日中戦争の開始とともに、慰問や戦跡観光がさかんになると、満洲の20余りの温泉地が旅行案内に紹介されるようになります。

ある社長の満鮮旅行

ここで、1920年代半ばの満鮮団体旅行の様子を観察してみたいと思います。旅人は、島原鉄道社長・植木元太郎です。植木元太郎は、島原半島の鉄道・観光施設整備に寄与した実業家であり、1924年に大連で開催された帝国鉄道協会総会に出席するため、関釜連絡船経由で満洲旅行に参加しました。そもそも、帝国鉄道協会の総会ならば東京で開催すれば

よいのですが、わざわざ大連で開催していることも、満鉄の営業努力の一端と言えるでしょう。5月9日の総会に出席するため、5月4日の夕方に下関を発った植木の旅程は以下の通りでした。

・5/5 早朝に釜山着、8・40朝鮮鉄道にて釜山発―大邱―大田―17・00京城着。

京城駅から人力車で土木建築協会及朝鮮鉄道協会が主催する歓迎会の会場へ。

・5/6 満鉄京城管理局主催の午餐会のほか、朝鮮総督官邸内緑泉亭での園遊会に参加。

・5/7 自由行動、13・40京城発―平壤―21・00過ぎ常州着。

常州で、一同は手荷物を座席に残したまま寝台車へと移動。手荷物は乗務員が保管。

0・00安東着。ここで中華民國の税関検査。また、時計を1時間遅らせ、満洲時間にあわせる。満洲時間で23・30安東発。

・5/8 7・00奉天着。その後満鉄本線に乗り換え、大連へ。

・5/9 帝国鉄道協会総会開催日。

・5/15までに旅順、鞍山、奉天、撫順を視察。北満を観光。

- ・ 5 / 18 23…00 長春発
- ・ 5 / 19 7…50 奉天着、安奉線乗り換え、8…45 奉天発。
- ・ 5 / 21 雲仙着

この旅行の様子を記した植木のメモからは、満鉄の実に行き届いた手配の様子が読み取れます。朝鮮鉄道の車中で一同に配布されたプリントには、寝台車に移動する際の注意や、奉天での洗面の案内などが事細かく説明されているのです。

この旅行団のメンバーが鉄道協会の会員であり、鉄道会社の業務内容の中に観光事業が含まれることを考えれば、満鉄が手配に最大限の配慮をしたことも頷けます。

鞍山製鉄所を視察した一行は、視察団体の常宿である湯崗子温泉対翠閣に宿泊しました。雲仙温泉公園の経営者でもある植木は、ガラス張りの温室をいつらえた大浴場や、その豪華な設備に憧憬ともいえる感想をいただき、是非雲仙にもこのような施設をとりいれたいと、旅行記に記しています。

■満鮮旅行の駅弁と食堂車

植木元太郎の旅行では、釜山を出発した後、朝鮮鉄道の座席に和食弁当が配ら

れました。田山花袋の旅行記などを読むと、朝鮮鉄道では刺身と吸い物付きの和食弁当が出たと記されています。また、北大路魯山人も「朝鮮の鯛」と題する文章の中で、朝鮮半島西海岸である時期に採れる鯛が美味であることを述べています。列車が北上し、満洲に入るあたりになると、和食を提供することは難しくなったようで、洋食弁当が売られました。

日露戦争直後、朝鮮半島を経由して満洲を旅行した日本人にとって、最も苦痛だったのは食事の低劣さであったようです。1906年に全国規模で行われた満鮮修学旅行の旅行記には、次のような一文があります。

バケツの飯、□□、竹等の入りたる汁、沢庵三切、梅干二個、糞や小便のまじりたる泥水、之が満洲旅行中の□食物なりとせば「中略」（余は苟と云はず敢へて竹と云へり、堅くして噛むべからざれば也、斯くの如き御馳走は片平町監獄内の御歴々と雖も稀「欠2字」ふ所の珍味ならん）

これは旅行に参加した仙台第一中学校の学生の文章であり、「片平町（原文ママ）監獄」とは仙台片平丁におかれた宮城県監獄署をさしています。満鮮の食事は所謂「臭い飯」にも劣るというわけです。



安東駅の駅弁のかけ紙（1920年代後半頃）

この大修学旅行から2年後の1908年、朝鮮鉄道には食堂車が連結されたが、状況はあまり改善されなかったようです。乗客の苦情や非難が絶えなかったため、1913年には指定業者による経営を罷め、鉄道の直営としました。釜山から京城を経由し、安東から満洲へに入る直通列車は満鉄の管轄でしたが、こちらと同じ時期に食堂車が連結されます。車内販売はしばらくの間は業者にまかされていましたが、1926年に食堂車の附属事業となり、大連食堂事務所が管理しました。

当時の駅弁のかけ紙（前頁写真）には、販売駅付近の地図や名所が描かれ、日本国内の駅弁と同様に、食事のみならず旅の情報を提供していたことがわかります。

■おわりに

鉄道協会の団体旅行に参加した時、植木元太郎は67歳でした。当時としては高齢者と言えますが、その帰路は大変な強行軍となっています。植木は、夜行で長春を出発した翌朝7・50に奉天に到着、休むことなく8・45発の列車に乗り換えて安東にむかいました。

植木がこのような無理をしたのは、日

露戦争で行軍した鶏冠山や鳳凰山を車窓から眺めるためです。往路は夜行列車で景色を見ることができなかったため、日中に安東を通過する列車を選んだのです。戦跡をせめて車窓からでも見たいという植木の想いは、今日私達が過去の旧跡としての戦場を観光するのは明らかに異なることばかりです。多くの男性の場合、そこは自らが参加した戦場であり、再訪による記憶の確認と追体験は新たな記憶を醸成したことでしょう。

植木は旅行後に『満洲巡遊記』と題する冊子を作成し、近親者や島原鉄道の社員に配布しました。このような私家版の冊子や旅のみやげ話によって、旅行者の経験は他者との間で共有されていたのです。

1920年代はじめ、中国旅行は満洲旅行としてパターン化し、温泉や駅弁といった日本の行楽独特の環境が整えられていきました。旅人の記憶と記録は、旅行を経験することのない国民にも、現実的な経験をともなわないエキゾチズムに満ちた中国像を分かち与え、それぞれの満洲観・「支那」観が形成されていきます。

1937年に日中戦争が始まり、こうした心性を持った日本人が「出征」とい

う形ではじめての中国旅行を体験し、そして想像だになかった激しい敵愾心に遭遇した時、その感情が、憧れから憎悪へと急激に逆転したであろうことは容易に想像できます。

1972年の日中国交正常化の後に起きた中国旅行ブームを振り返り、そして今日の日中間における、感情的ともいえる対立を鑑みる時、そこには、上に述べたような心性史が繰り返えされているようにも思われるのです。

（3月7日・フォーラム）

講師略歴（たきした さえこ）

1964年 埼玉県生まれ

1998年 お茶の水女子大学大学院

後期博士課程単位取得退

学

2001年 東洋文庫図書部

2003年 同 研究部

2009年 同 研究部主幹

論文 「抗日漫画宣伝活動と『国家総動員画報』の作家たち―醸成される抗日イメージ」 「戦前期満洲の三大温泉―旅行案内に見る旅館施設等の変遷」 など